（第3種郵便物認可）

読売俳壇

高野ムツオ 選

春祭農事に疎きまま老いぬ
横浜市　吉野　暢

【評】代々の農家に生まれた人。ゆえあって、農業とは異なる道を選んだ。だが、どこかに悔いは残る。春祭で五穀豊穣を祈るたび、その思いは深まる。老境なお迷境にあり。

花の宴明日のことなら明日に聞け
熊本市　夏風かをる

【評】桜の美しさに、宴の楽しさに、酔いが回っての本音だろう。刹那的だが、誰しもそう思う時がある。一時の享楽もまた人間そのもの。

春雨や妻を偲べばまた楽し
いわき市　熊坂　正志

【評】亡き妻との相合傘を思い出したのだ。雨の日も嵐の日もいつも共にあった。その分寂しさ一入。お惚気もここまでくると頷くばかり。

ここからは我が領域と虻唸る
三原市　上脇　立哉

いつの世もただならぬ世や月朧
つくば市　小林　浦波

月山に先づ一礼し新学期
甲斐市　松田　健嗣

すみれ草変はり変はらぬ浜通り
小山市　松本　喜雄

満員のバスに揺られて西東忌
相模原市　はやし　央

桜蕊降るサーカスのテントかな
横浜市　塚本　文武

卒業歌はずす眼鏡を膝の上
西宮市　塩川　直樹

正木ゆう子 選

どこからか洗濯ばさみ春の芝
名古屋市　徳広　光恵

【評】バネで跳んだか、烏のいたずらか。見覚えのない洗濯ばさみが庭に。何色だろう。萌え出たばかりの若芝に、小さなプラスチック。異質な二つが出会った春の点景。

春菊をてんぷらに茎をきんぴらに
会津若松市　佐藤　秀子

【評】内容も面白く、さらにてんぷらときんぴらの音の類似がリズミカルな一句。「ん」と「ら」が同じで、どちらにも半濁音、「ぷ」と「ぴ」。

チョウドリィさんといふ名や新社員
足利市　長　芳男

【評】耳慣れない素敵なお名前だなと思いつつ、作者名を見ると、「チョウ」が同じだ。作者もそれでいっそう親近感を覚えられたのだろう。

隙間から差し入れてくる子猫の手
大津市　竹村　哲男

猫の子や吾も知らざり父の声
神栖市　桐本　博昭

葦牙の尖焼けたるもありにけり
大阪府　池田　寿夫

庭の八本千六百個夏みかん
松戸市　稲葉　豊美

倒れしは春の嵐の蘇鉄かな
鶴ヶ島市　由井　意男

夫が居た味噌溶く朝の蜆汁
酒田市　石塚　禎子

少年を冷まし励ましげんげ田は
奈良市　奥　良彦

小澤　實 選

海女小屋にミルクと襁褓プロテイン
対馬市　神宮　斉之

【評】この小屋を本拠に仕事をする海女には、乳飲み子がいるらしい。そのためのミルクと襁褓。プロテインはしっかりと泳ぎ、深く潜る筋肉を増強するために飲むわけだ。

ビール缶握り潰して啄木忌
高松市　樋口淳一郎

【評】啄木忌は四月十三日、この句の主人公は歌人啄木と同じ鬱屈を抱いている。飲み終えたビール缶を握り潰すところにそれを感じる。

突風に落ちざる椿鵯落とす
宝塚市　広田　祝世

【評】長らく吹いていた突風にも落ちることなく咲いていた椿の花であるが、蜜を吸いに来た鵯があっけなく落としてしまったというのだ。

アンカーのバレー部エース風光る
新潟市　古泉　浩子

信長に桃形兜春の雷
千葉市　小沢　公彦

鴉来て燕の雛を銜へ去る
名古屋市　可知　豊親

起立して四十五度の新社員
東大阪市　木田　博幸

孕雀に厚切りのパンの耳
大阪市　今井　文雄

水速きところは痩せて花筏
東京都　望月　清彦

振って出す缶のドロップ野に遊ぶ
東京都　吉田　徹夫

津川絵理子 選

独りならラジオも家族菜種梅雨
横浜市　宮川　ゆず

【評】独りでいると、ラジオの人声があるとホッとする。家族のように感じる気持ちも分かる。寂しさより安心感が伝わる。菜種梅雨の少し明るい雰囲気が合う。

もしもしと妻の声あり夕桜
豊中市　一色　正明

【評】電話を掛けて、「もしもし」と応答がある。いつもの妻の声だ。平穏な日常を掬い取り、間もなく散る夕桜に永遠を見たいと願う。

今どこにでもある戦地鳥帰る
神戸市　田上　勝清

【評】戦争が長引いているところへ、また新たな戦争が起こる。どこも戦地になりうる恐ろしさ。季語により地上の悲しみが強く感じられる。

凡人に凡日のあり座禅草
柏　市　藤嶋　務

子供歌舞伎楽屋に届く桜餅
行田市　吉田　春代

めまとひを打つべく眼鏡外しけり
朝倉市　深町　明

ことごとく葉のひとひねり黄水仙
町田市　枝沢　聖文

げんげ田の日暮れあやかし湧きにけり
四街道市　須崎　輝男

凸凹に苦心の跡や燕の巣
富山市　藤瀬　晴夫

替へ時の夫のエプロン土筆飯
志木市　谷村　康志

俳句あれこれ　大塚凱（俳人）

Haiku 人間的な時間

Anthropic社のAI「Claude」には、Opus、Sonnet、Haikuといったモデルが揃う。いずれも音楽と詩歌に因む名で、その名の通りHaikuは最も軽量・高速なモデルだ。この頃はこれを用いて身辺の物事をひたすら自動化している。かつて『AI研究者と俳人』という本を出す機会に恵まれたが、それから四年、寝食を忘れて、バイブコーディングの隙間になんとか生活を回す本末転倒の日々にある。たわむれに、私的利用の範囲で自分の評論や選評を学習させてオンライン句会の選をさせたら、生身の私の選とそう変わらぬ選をしてきて、たまげた。

そのぶん、判断や交渉、或いは他者との合意形成にかける時間が密になった。そのとき私が差し出しているのは結局のところ言葉であり、思想と倫理であり、おのれの価値観を問われている瞬間なのだと思う。それは私に残された、とても人間的な時間のように感じている。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭